様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月１０日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５３０８８８
研究課題名（和文）　幼児期と思春期に焦点を当てたＡＤ/ＨＤへの統合的心理社会的治療に関する研究
研究課題名（英文）　The study of integrated psychosocial treatment for AD/HD focused on early childhood and adolescence .
研究代表者　岩坂　英巳（ＩＷＡＳＡＫＡ　ＨＩＤＥＭＩ）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：７０２４４７１２

研究成果の概要（和文）：本研究は、AD/HD へのライフサイクル全般で、本人の特性や生活スタイルに応じた包括的な心理社会的治療の指針となるような実践研究である。早期支援のためのニーズ把握を簡易な質問紙(SDQ)などで行い、関係機関と連携しながら、年齢や生活場面に応じたペアレントトレーニングや SST を実践するとともに、実施機関を増やすことができた。二次障害がでやすい思春期においては、脳生理学的検査も併用し、学校での支援モデル作りを推し進めるとともに、新たなソーシャルスキル尺度を開発した。

研究成果の概要（英文）：This research is a practical research based on personal characteristics and life style to make a comprehensive psychosocial treatment guideline in Japan. We practiced parent training and SST depending on the aspects of ages and life, and increased agency to do them cooperating with relevant organizations, understanding the needs of the early support by a questionnaire (SDQ). Secondary disorder in easy to adolescence in the cerebral electrophysiological tests are also used to support model making schools promote together. Then we also developed a new social skill scale.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：AD/HD、心理社会的治療、ペアレントトレーニング、SST、早期支援、評価尺度

１．研究開始当初の背景

(1)2005 年発達障害者支援法、2007 年特別支援教育が開始し、AD/HD は「成人まで続く脳機能の障害」として、ライフサイクルに応じた連携に基づく治療・支援の必要性が強調されている。

(2)医療・保健・福祉・労働・保育・教育間での連携は十分とは言い難く、その原因として本人特性把握の難しさと共有できる治療手技の乏しさが背景にあると思われる。
(3)研究代表者は、米国UCLAで実施されているAD/HDへのペアレントトレーニング（PT）とソーシャルスキルトレーニング（SST）の日本語版を開発、実践し、2005 年から 2007 年度までの基盤（C）研究「AD/HD児への統合的心理社会的治療の開発に関する研究―ペアレントトレーニングとソーシャルスキルトレーニングの日常場面での展開―」において、その有効性を実証するとともに、より日常生活場面に即した形でのプログラムの変容にも力を注いできた。
(4)上記の実践の中で、幼児期の早期支援や思春期の併存障害にも対応できる包括的な心理社会的治療の必要性が明らかになった。

２．研究の目的
(1)奈良教育大学特別支援教育研究センターと奈良県立医科大学精神医学教室児童思春期グループとの臨床および研究の連携体制を軸に、地域の教育委員会や保健センターなどの協力も得ながら、AD/HD の診断・評価の精度を高めたうえで個々のニーズに応じた統合的な心理社会的治療計画をたて、子どもの生活場面で実践する。
(2)上記治療の効果判定を行い、そしてその結果を元にさらなる長期的な支援計画を作成することでモデル的な心理社会的治療を構築する。

３．研究の方法
早期支援と思春期支援の２つのモデルを展開していく。
(1) 早期支援モデル
① A 市における幼稚園、保育園４、５歳児対象のSDQによるスクリーニング調査
② AD/HD 疑い群に対する多面的評価に基づく初期支援計画の作成
③ 保健センターや療育機関での PT 幼児版の開発と実施による親子支援
④ 園や学校での研修、およびPT学校・園版（ティチャートレーニング：TT）およびSST学校版の実施による支援体制作り
⑤ ③④の治療効果判定に基づく長期的支援計画の再検討とフォローアップ会議
(2)思春期支援モデル
① 思春期および前思春期に AD/HD を疑って受診した群への ERP および NIRS 検査（奈良県立医科大学にて）
② AD/HD 疑い群に対する多面的評価に基づく初期治療計画の作成
③ 奈良教育大学特別支援教育研究センターおよび奈良県総合リハビリセンターでの思春期例を含めたPTおよびSSTの実施
④ 学校での研修、および高校での特別支援教育の実施による支援体制作り
⑤多面的評価と治療効果判定のための本人、保護者、教師の３者からみた「ソーシャルスキル尺度」の開発
⑥ ③④の治療・支援効果判定に基づく長期的支援計画の検討とフォローアップ会議

４．研究成果：主な研究成果のみ報告する。
（１） 早期支援モデルにおける成果
① 奈良市幼稚園､保育園在籍４－５歳児815名（全幼保育園児の24%）への保育士へSDQ(StrengthDifficultyQuestionnaire)を実施し、約10%の幼児に多動や集中困難、対人関係の問題などの特別な教育的ニーズがあることと各下位尺度に性差がみられることがわかった。また、支援ニーズを把握するためのカットオフ値を以下の通り設定することが可能であると考

えられた。

【教師版 SDQ4～5 歳児カットオフ値(試案)】

Ⅰ. 正常域：情緒の問題男児 0-4、女児 0-4、行為の問題 0-４、0-2、多動・不注意 0-7、0-5、仲間関係の問題 0-4、0-3、向社会性 2-10、4-10

Ⅱ. 臨床域：情緒の問題男児 6-10、女児 6-10、行為の問題 6-10、4-10、多動・不注意 9-10、8-10、仲間関係の問題 6-10、5-10、向社会性 0、0-2

② これまでの PT に参加した第１期から８期までの計 49 名において、ADHD－RS 総得点による行動評価では、親評価で有意に改善していたが（p<.05）、教師評価で有意傾向にとどまった。不注意項目では、親評価では有意傾向、教師評価では不変、多動―衝動性項目では、親評価で有意に改善（p<.05）、教師評価で有意傾向であった。子どもの心理面の質問紙においては、「いじめられてもやめてと言える」という項目が有意に改善（p<.01）、「家族と話すのが好きだ」も改善（p<.05）していた。参加メンバー（親）の子どもの障害受容やかかわりの自信についての質問紙（家族の自信度）では、著明に改善がみられ、「本人の成長を焦らすに見守る」「1 日 1 回以上本人をほめる」「自分自身の不安を減らす」「本人の行動が理解できる」「本人と一緒にいて楽しい」など多くの質問項目において１％水準で有意に改善していた。なお、終了 1 年後の調査においても（対象は 1－6 期までの 35 名）、多動―衝動も、不注意も効果は持続しており、特に家族の自信度は著明改善の効果が持続していた。対象児の多動、不注意が家庭にて、多動が学校にて有意に改善し、参加母親の子どもの障害理解とかかわりの自信も改善していた。

③ 研究者らがリハビリセンターで実施している SST 第１期から７期までの参加児童 45 名（小学 3～6 年生、ADHD やアスペルガー障害など何らかの発達障害の診断がついている）について、その治療効果を SST 前、SST 後、さらに SST 終了半年後（フォロー時）調べたところ、興味ある結果が得られた。ADHD-RS による行動評価では、親評価では不注意、多動とも SST 前後で有意に改善し、半年後も維持されていた。教師評価では、SST 前後では有意な差がみられなかったが、半年後には SST 前と比べて有意な改善がみられていた。子どもの本人評価であるスキル尺度では、前後に差が見られなかったが、標的スキルに合わせて独自に作成した尺度（10 項目）では、本人評価でよくなっていた項目は、「相手の気持ちや場面を読む」「遊びに誘う」であった。スタッフによる評価では、本人評価でよくなっている分に加え、「ほめる」「断る」「怒りをコントロールする」など 8 項目で有意に改善していた。これらの事前評価では、子どもの評価がスタッフより高い傾向がみられていた。今後、本人、他者で共通してできるようなスキル尺度の開発も必要であると思われた。また、対人自己効力感は前後で改善していなかったが、スキルと自己効力感の間には相関がみられた。

④ 新たに開発して実施した TT 幼児版について、参加した 8 名にて効果判定を行った。保育者効力感尺度は 8 名全体の平均得点はセッション前(32.75)よりもセッション後(35.63)の方が有意な傾向で高くなっており、対象幼児 7 名の SDQ の TDS 平均得点はセッション前(19.00)よりもセッション後(16.29)の方が有意に低くなり、保育士から見て支援の必要性が軽

減していた。

（２） 思春期支援モデルにおける成果

① 前思春期例を含めた SST 参加児へのERP(事象関連電位)と NIRS は SST 前後でのデータは集積中であり、ERP での改善など興味深い結果が得られてきているが、研究途上であるため、本報告書への記載は控えることとする。

② 新たな課題となった自己評価と他者評価をあわせたソーシャルスキル尺度(56 項目)を開発し、県内小学校の保護者 1,130 名、教師360名、こども1,335名の計2,885名への調査の結果、信頼性と妥当性が確かめられた。保護者版主成分分解実施時のスクリープロットおよび主成分分解を実施した際の 2 因子の因子負荷量、およびプロマックス回転を行った後の因子負荷量から、主成分抽出後の 2 因子の累積成分度は 31.7%であり、教師版でも同様な結果が得られたことから、この質問紙の 56 項目は2因子で解釈するのが妥当であることが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　11 件）

①Hidemi Iwasaka, Hiroko Okuno et.al: Effectiveness of modified parent training for mothers of children with Pervasive Developmental Disorder on parental confidence and children’s behavior, Brain and Development, vol 33, 152-160, 2011

②岩坂英巳、松浦直己：不登校リカバリー群の心理・発達的特性－不登校経験者に関する準備的研究－、奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要、査読有、20、73-78、2011

③岩坂英巳、高橋弘幸：AD/HD のソーシャルスキルトレーニング、精神科治療学、査読有、25、p911-918、2010

④岩坂英巳：教育分野における SST―医師が知っておきたい SST の適応と効果―、精神神経学会雑誌(電子ジャーナル)、査読有、2010

⑤岩坂英巳、全有耳ら：ペアレントトレーニングの手法を用いた保健所における親支援教室の有用性に関する検討、小児保健研究、査読有、(受理)

⑥岩坂英巳：奈良県における児童精神科医療と学校との連携、児童青年精神医学とその近接領域、(印刷中)

⑦岩坂英巳：成人の AD/HD の非薬物療法、精神科、査読無、17、507-512、2010

⑧岩坂英巳:ADHD のペアレントトレーニング、Pharma Media、査読無、11、39-44、2010

⑨岩坂英巳、根津智子ら：教師版 SDQ を用いた４～５歳児の特別な支援のニーズ調査、奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要、査読有、113-118、19、2010

⑩岩坂英巳、植村里香ら：友達とのかかわりが苦手な子どもに対する SST の試み、奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要、査読有、18、211-216、2009

⑪Hidemi Iwasaka, Masanori Kyo et.al.: Relationships between Event-Related Potentials and Severity of ADHD in Children, Jpn. J. Child Adolesc. Psyhiatr., vol48,1-10, 2007(発行は 2008)

〔学会発表〕（計９件）

① Hiroko Okuno, Hidemi Iwaska et.al.: Evaluation of modified parent training for mothers of children with pervasive developmental disorders 、19th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry 、June 6, 2010、Beijing, China

②岩坂英巳：教育分野のＳＳＴ―活用ＳＳＴ、医師が知っておきたい SST..の適応と効果（シンポジウム）－、第 106 回日本精神神経学会学術総会。2010 年 5 月 21 日、広島

③岩坂英巳：奈良県における児童精神科医療と学校との連携、第 51 回日本児童青年精神医学会総会、2010 年 10 月 30 日、前橋

④岩坂英巳：ペアレントトレーニングの現状と今後の展開について（シンポジウム　発達障害のトータルケアを目指して～最前線の取り組から～)、第 50 回日本児童青年精神医学会、2009 年 9 月 30 日、京都

⑤植村里香、岩坂英巳ら：発達障害のある子ども達に対するSSTの試み（１）～奈良教育大学特別支援教育研究センターでの実践より～、第50回日本児童青年精神医学会、2009年10月2日、京都

⑥宮崎瑠理子、岩坂英巳ら：発達障害のある子ども達に対するSSTの試み（２）～感覚統合理論の視点から～、第50回日本児童青年精神医学会、2009年10月2日、京都

⑦高橋弘幸、岩坂英巳ら：AD/HD児に対するS

STの効果および今後の課題第50回日本児童青年精神医学会、2009年10月2日、京都
⑧岩坂英巳：特別支援教育～具体的な実践をめぐって(シンポジウム)～大学の立場から、第49回日本児童青年精神医学会総会、2008年11月5日、広島
⑨岩坂英巳：特別支援教育研究センターからの専門プログラムの地域への発信、日本ＬＤ学会第17回大会、2008年11月23日、広島

〔図書〕(計 5 件)
①岩坂英巳：ペアレントトレーニング（in 脳とこころのプライマリケア「子どもの発達と行動」)、シナジー、10 ページ、2009 年
②岩坂英巳：発達障がいのある人への SST（in わかりやすい発達障がい・知的障がいのSST実践マニュアル)、中央法規、9ページ、2010 年
③岩坂英巳：ペアレントトレーニングについて教えてください（in 教育と医学 9 月号)、慶応義塾大学出版会、7 ページ、2010 年
④岩坂英巳：おとなのＡＤＨＤ　（in 大人の発達障害)、日本評論社、5 ページ、2009 年
⑤岩坂英巳：ペアレントトレーニング（in「治療」)、南山堂、6 ページ、2008 年

〔その他〕
ホームページ等
http://nara-edu-csne.org/

６．研究組織
(1)研究代表者
岩坂　英巳（IWASAKA HIDEMI）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70244712

(2)研究分担者
玉村　公二彦（TAMAMURA KUNIHIKO）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00207234
越野　和之（KOSHINO KAZUYUKI）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90252824
根來　秀樹（NEGORO HIDEKI）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80336867
飯田　順三(IIDA JUNZO)
奈良県立医科大学・医学部・教授
研究者番号：50159555
郷間　英世(GOMA HIDEYO)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40234968
松浦　直己(MATSURA NAOMI)
東京福祉大学・教育学部・教授
研究者番号：20452518